中島敦「わが西遊記」（一）

近代文学をアップデートする ④

池上貴子

「とんでもなくおもしろい」秘密を探る

小説『鴨川ホルモー』（二〇〇六年四月、産業編集センター）、『鹿男あをによし』（二〇〇七年四月、幻冬舎）で知られる直木賞作家の万城目学が、学生時代に「現代文のテストにとんでもなくおもしろい文章が出題された」と衝撃を受けたエピソードを語っている。[1]「こんな文章を書ける作家になりたい」と、万城目に小説家になることを決意させたその作品とは、中島敦の「悟浄歎異」だった。やがて万城目はその作品が「悟浄出世」を含む「わが西遊記」シリーズの一作であることを知る。（両作の末尾には「『わが西遊記』の中」と記されている。）

中国の古典作品である『西遊記』で有名な登場人物と言えば、経文を受け取りに天竺（インド）を目指す三蔵法師と、元妖怪の弟子である猿の孫悟空、豚の猪八戒、水怪（すいかい）の沙悟浄だろう。彼らは徳の高い師（三蔵）を狙う様々な妖怪達とバトルをしていく。漢文学に精通していた中島敦は、この不可思議な一行の旅物語に触発され、やがて沙悟浄を視点人物に据えた小説二編を執筆した。

「悟浄歎異」は、三蔵法師の弟子となった沙悟浄が、悟空や八戒そして師である三蔵を驚嘆と憧れをもって観察する作品であり、「悟浄出世」は三蔵たちに出会う前の沙悟浄の話で、自分と自分を取り巻く世界に対して鬱屈し、答えを求めて様々な思想家や哲学者たちの門戸を巡る作品だ。

周知の通り、中島敦は三十三歳で早逝した作家である。晩年に発表された「わが西遊記」も続編が書かれることはなかった。しかし、万城目は未完に終わったこの中島版『西遊記』の続編を「心から渇望」し、ついには「永遠に読めないあの話の続き」として二〇一四（平成二十六）年七月に『悟浄出立』（新潮社）という続編的作品を再創作したのである。[2]この万城目学が語った「悟浄出立」の創作秘話は、中島敦の「わが西遊記」シリーズが、現代の読者にも支持される高いポテンシャルがあることを証明している。

従来の研究において、「悟浄歎異」（以下「歎異」）と「悟浄出世」（以下「出世」）の両作は、中島敦という作家の実

人生や、時代背景（特に第二次世界大戦の影響）とともに詳細に分析されることで、数多くの作品解釈が提出されてきた。たとえば山下真史[3]は、「出世」の文脈に谷崎潤一郎の『母を恋うる記』を重ね、「母恋い物語としての『わが西遊記』」と解釈した。また「歎異」については「戦記文学」にみる兵士の表現に共通項を見出し、悟浄もまた純粋な「行動」によって自意識の克服を試みたと考察する。いずれも大胆な解釈といえるが、この読みはどうしても限定されたものにみえる。なぜなら、幼少期より生母と疎遠だった中島敦の家庭環境や、第二次世界大戦時のイデオロギーといった時代背景への理解なくして到達しえない解釈だからだ。

奇しくも小説家の万城目が、作家名すら書かれていないテストの「切り取られた文章」でさえも、「とんでもなくおもしろい」と魅せられたように、現代にも通用する開かれた近代文学として「わが西遊記」を再発見したいなら、従来の研究とは違ったアプローチを試みてもいいのではないか。中島敦という作家を知らずとも、当時の時代状況を知らずとも、それら情報を越えて読み手の心をつかむ作品自体の可能性にいま一度目を戻してみたい。

キャラクター化と〈萌え〉でみる「わが西遊記」

中島敦の作品の多くは漢文学を原典とし、語彙の難解さは確かにあるが、今も教科書や副読本に採択され、その読書体験が若い世代の心象と記憶に残り続けている。そのことを間接的に証明しているのは、大人気のコミックス『文豪ストレイドッグス』（二〇一三年一月、ＫＡＤＯＫＡＷＡ）の主人公が、漱石でも太宰でも芥川でもなく、「中島敦」であることだ。理由の一端は、若年層による中島作品の消費のされ方にあるだろう。あえて現代風に言えば、中島の作品はキャラクターの働きやキャラクター同士の関係性をテクストから深く読み取り、耽溺することができる。いわば「萌え」られるのだ。[4]

ここで中島作品の登場人物をあえて「キャラクター」と表現したのは、作品をライトなものだと軽視したわけではない。[5] キャラクターとは、完全なオリジナルの表象として発現するものではなく、当時の文化のパロディやオマージュ等々いわば時代のエートスによって「キャラクター化」するものだ。つまり時代の要請を受けて「萌え」、愛でられるものの総称といえる。その意味で、文学において、登場人物達が時代ごとにキャラクター化され、現代においても様々なメディア媒体で二次創作（再創作）され続ける作品は、『西遊記』をおいてほかにないだろう。そして面白いのは、『西遊記』自体もまた、その成立に別の原典を持つ、いわば二次創作的な作品であることだ。